

不易流行

～和賀組社長からのメッセージ～

VOL.51 (2020.6.26)

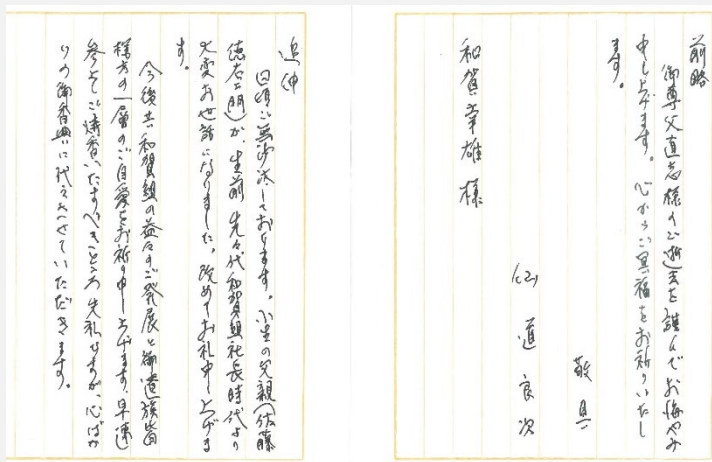
令和2年度スローガン
みんなで目指す顧客感動経営
全てのステークホルダーの満足度向上
～和賀組さんで良かったと言われよう～

株式会社和賀組 代表取締役 和賀幸雄

2年前に移転するまで本社所在地であった湯沢市岩崎字岩崎 110 番地は雄物川の支川皆瀬川の河畔で、昔は羽州街道をつなぐ渡し舟が往来する渡船場があり、対岸の十文字町古内地区と結ばれておりました。元禄時代の船賃は銭五文だったそうです。1877 年（明治 10 年）ここに木橋が出来たという記録がありますので、初代和賀市蔵は創業と同時に木橋建設に携わったということになります。58 年後の 1935 年（昭和 10 年）、橋長 235.7m 幅員 6.4m のゲルバー橋 岩崎橋（現在名十文字大橋）が完成、当時の発注官庁は内務省（建設省→国土交通省と変遷）で、土木技術者として宮城県登米市出身の佐藤徳右衛門氏が赴任しておりました。徳右衛門氏は北上川の改修工事をはじめとして東北管内の現場を担当、昭和 9 年に完成し当社が下部工に携わった秋田大橋の建設も担当しておりました。そうした縁で創業者の娘婿二代目と賀福太郎と長男の和賀眞一は佐藤氏をスカウト、徳右衛門氏は岩崎に居を構えることとなり、このことはその後和賀組が秋田県内各地で橋梁工事に携わることにつながる大きな契機となりました。佐藤氏には 6 人の子供がおり、その 5 番目の良次さんは登米高校を卒業後秋田大学に進学、下宿先は和賀眞一・巽（次男）が住んでいた保戸野の家だったそうです。

6 月 9 日午後 9 時 9 分、和賀直志会長が 7 月 1 日の満 87 歳の誕生日を待たずに病院で息を引き取りました。13 日の火葬・葬儀、初七日の法要とあわただしく時が過ぎていきましたが、初めてお会いする親族の方々や久しくご無沙汰していた皆さんと色々なお話をすることができました。幼少時代はいじめられてもじっと耐えている子供で、「先生から何故やり返さないのかと言われていた」「兄二人が病死・戦死ということでもっと大事に育てられた」というエピソードや、高校時代の親友の方からは古い写真を送って頂いたりもしました。直接弔問にお出で頂けない方からも沢山の弔電やお悔みのお手紙を頂戴しました。その中に仙台在住の仙道良次様からのお手紙がありました。前述の佐藤良次さんはその後高校教師となり湯沢市内町の仙道家に養子入り、退職後に仙台市に転居されていたのです。

和賀組が飛躍するきっかけとなった佐藤徳右衛門氏との出会い。その息子さんの良次さんから湯沢高校で地理を教えて頂いた私。卒業から 16 年後に和賀組に入社……。なにかとても不思議な「縁」を感じる体験をすることができました。人の死はもちろん悲しいものですが、葬儀や法要を通して親族の絆や繋がり、そして不思議な「縁」というものを改めて感じることができる……。だからこそこの先も法事等で先祖を供養するために親族が集まるのが大事なのだと深く思い至りました。



湯沢翔北高校雄勝校出前講座

新型コロナウイルスの影響で高校出前講座が中止となる中

6 月 3 日に今年度唯一の出前講座が翔北高校雄勝校で開催されました。50 分という時間でしたが皆さん真面目に聞いて頂き、積極的な質問も出ました。



第 57 回定時株主総会

6 月 6 日第 57 回定時株主総会が開催され、事業報告並びに決算が承認されました。また新たに和賀一晟が取締役に選任されたことを報告いたします。



初の ZOOM 職員会議



6 月 20 日の職員会議は初めて午後 3 時からの開催で、現場からリモートでの参加も初めての試みでした。私も自宅からの参加でしたが、違和感無く、今後の大きな流れとなるものと確信しました